

食を育てる喜び

あいみ手間山地域振興協議会と南部中学校の取り組み



■「食」と「農」のつながり

現在「食」に関わる問題のひとつとして、食料自給率の低下が上げられます。店には輸入品があふれ、食料が豊富に存在することが当たり前になり、食事を残したり、捨てたりすることが日常的に起こっています。

そこには、毎日の食生活において「食」と「農」のつながりが見えなくなり、農産物がどのように育てられているのかわからない子どもたちが増えているのもあるのではないのでしょうか。特に子どもへの食育は、自分自身が体で感じ、気づき、発見するなどの食育体験を提供することが大切です。

■地域と学校の共生

「紐は支柱に8の字に結んで」「これで大丈夫ですか?」「もっと支柱と苗を離さんといけんわ」と、てま山農園から明るい声が響きます。

5月10日、南部中学校の教員や生徒、振興協議会の職員、部員が集まり、長茄子やピーマン、キャベツなどの夏野菜の苗植えを行いました。

あいみ手間山振興協議会では「耕作放棄地解消策の手助けになれば」と、特定農地貸付法により、昨年から天萬地内に

てま山農園を営んでおり、収穫した無農薬野菜を地区の独居の方や高齢者の家、約200戸に配布しています。

南部中学校は、同コミュニティスクールと協力し今年度「地域に貢献しよう」を柱に、地区のイベントや農業体験などを通じて子どもたちと地域との絆を深めようと、様々な取り組みを計画しています。

今回はその第1回目。学校内でボランティアを募集したところ、31人の参加者がありました。その内家庭で苗植えをしたことがある生徒は2人。慣れない手つきの中、地域の方と一緒に作業を行いました。田丸校長は「自分の植えた野菜は気になりますよね。野菜作りの楽しさ、難しさを体験し、野菜に親しむとともに、食を大切にすることを育む。これも食育ではないでしょうか」と話しました。



(左から)南部中学校・田丸校長、同コミュニティスクール・小川会長、あいみ手間山地域振興協議会・唯会長